

総合とは別の仕方

—カントにおける構想力と形象能力—

永守 伸年

はじめに

カントの構想力 (Einbildungskraft) はさまざまな思想的背景を持ち、批判哲学のさまざまな局面に現れる。そのために構想力はしばしば一貫性を欠いた能力とみなされ、とりわけその「連想」や「再生」をめぐるカントの記述は悪しき心理主義として敬遠される傾向にあった。

他方、カントの構想力を積極的に評価しようとする従来の研究には一つの共通点がある。それは構想力の理論をその心理主義的側面ではなく、全体性の理念との関係から捉えなおそうとするアイデアである。たとえば坂部恵は、構想力の理論に「〈原子論的〉な見方から[...]ダイナミックな総合のはたらきの場のいわば一次性を強調する〈全体論的〉な見方への転回」が認められることをすでに指摘していた。「転回」が明らかなのは『純粹理性批判』(以下『第一批判』) だろう。批判哲学の始まりを告げるこの著作において、構想力の総合 (Synthesis) 経験の全体性に関与する。それはあらゆる表象の部分に先行し、また部分を可能にするような「可能的経験の全体 (Ganze aller möglichen Erfahrung)」の総合である (A267/B323)。坂部によれば、構想力の理論はこのように「全体論的な (holistic)」活動、すなわち総合の活動によってコペルニクスの転回に照応するパラダイム・シフトを遂げることになる(1)。

しかし、M・ハイデガーから W・ワックスマンに至るまで、従来の構想力研究はいくつかの課題も残してきた。第一の課題は構想力と全体性の理

念の関係がいつ、いかにして成立したかが不明瞭な点にある。ここでは経験的心理学を基礎とする前批判期の形象能力（Bildungsvermögen）と『第一批判』の構想力の異同、あるいは両能力の連続性が問われるだろう。第二の課題はそれ以後の時期、すなわち『第一批判』から批判後期にかけての構想力の理論的進展を明らかにすることにある。E・カッシーラーや三木清の示唆するように、構想力の理論は『判断力批判』（以下『第三批判』）においても一つの「転回」を遂げているように思われる⁽²⁾。それは感性的なものから超感性的なものへの、そして対象の側から主体の側への焦点の移行である。おおまかに述べるならば、これら二つの課題は構想力の「全体論的な」活動の成立と、その発展の内実を示すことを求めている。

このような問題背景のもと、本研究は第一の課題を再吟味することで、第二の課題に応答することを目的とする。そのためには『第一批判』の総合に焦点を絞ってきた従来の研究よりも多くの文献調査をおこない、はるかに広い射程から構想力の理論を捉えなおさなければならない。具体的には以下のような手続きにしたがって議論を進めていく。まずは批判哲学における構想力の理論をサーベイしたのち、坂部の述べる「全体論的な」活動の内実を『第一批判』の記述に即して整理する（一節）。続いて一七七〇年代の講義録を検討し、前批判期の形象能力の理論に全体性の理念をめぐる二つの系譜が見出されることを指摘する（二節）。その上で、『第三批判』の構想力が形象能力の有していた広い理論的射程を継承しつつ、合目的性の表象に際して新たな発展を遂げていることを明らかにする（三節）。

1. 批判期における構想力の多様性

1.1 再生的／産出的

まずは、構想力をもっとも体系的に論じている『第一批判』と『実用的見地における人間学』の記述を確認することから始めたい。構想力は包括

的には「対象が現前していなくても直観しうる能力」として定義され、この能力はさらに再生的／産出的活動に区別される（B151, VII: 67）。再生（Reproduktion）が対象を「心の内に取り戻す」経験的な活動である一方（A100, VII: 167）、産出は（Produktion）経験的産出、すなわち狂信（VII: 172）や創作（V: 314）だけでなく、超越論的産出と呼ばれる活動も含む。『第一批判』の焦点になるのはこの超越論的産出である。それは「すべての経験の可能性を基礎付け」、あらゆる経験的再生にアプリアリな根拠を与えるという（A101-102）。

では、何が産出されるのか。『第一批判』の第一版演繹によれば、構想力は「再生の総合と分かちがたく結ばれている」覚知（Apprehension）の総合において表象を見通し、見通したものをまとめることで「一つの形象（Bild）にする」（A120）。このような形象化にとどまるならば総合は局所的なものになるだろう。しかし、カントは覚知の「見通し（Durchlaufen）」が「線の最初の部分や、時間の先行する部分」を超え、「空間・時間というもっとも純粹で最初の基本表象（erste Grundvorstellungen）」にまで及ぶことを主張する（A102）。この主張は第二版演繹では「それによつてはじめて空間・時間の概念が可能となるような総合」という表現で繰り返され（B161）、『実用的見地における人間学』でも次のように述べられる。

〔構想力が〕産出的である場合とは対象を根源的に描出する能力であり、それゆえこの産出は経験に先行する。[...] 純粹な空間直観および時間直観はこの根源的な描出に属する（VII: 167）。

つまり、産出されるのは空間・時間の「基本表象」であり、この表象の全体性が坂部の述べる構想力の「全体論的な」活動の内実をなしている。周知のように『第一批判』において空間・時間は部分的な再生の集積とし

ての全体 (compositum) ではなく、部分に先行する全体 (totum) である (A438/B466)。「空間・時間は […] 経験のあらゆる所与に先行し、これらをはじめて可能にする」(A267/B323)。このようなカントの全体論 (holism) の背景には、あらゆる経験的真理の根拠を「可能的経験の全体 (Ganze aller möglichen Erfahrung)」に認める超越論的真理 (transzendente Wahrheit) の構想がある (A146/B185)。

ただし、以上の議論はなお不明瞭な論点を残す。一つは『第一批判』の「感性論」との整合性である。「感性論」によれば空間・時間は「心のうちにアプリアリに用意されていなければならない」ような「受容性の不変の形式」である (A20/B34, A27/B43)。しかし、受容性のアプリアリな形式が構想力の自発的な総合によって産出されるという事態は奇妙ではないか。もう一つは冒頭に指摘した第二の課題、すなわち「総合」を超えた全体論の所在である。従来の研究は演繹論を中心に構想力を論じてきたが、カントは他のさまざまな局面でもこの能力の全体論的活動を示唆している。たとえば「方法論」における超感性的なものの仮説 (A770/B798)、実践哲学における幸福の理想 (IV: 418)、歴史哲学における歴史全体の憶測 (VIII: 109)、とりわけ強調されるのが崇高論における総括 (Zusammenfassung) である (V: 254)。

1.2 原子論的／全体論的

これらの難題を回避する一つの方法は P・F・ストローソンのように構想力を局所的な知覚の場面に限定し、全体論的活動をカントの形而上学の「おとぎ話」として退けることである(3)。しかし本論の見るところ、この活動は批判哲学の枠組みにおいて十分に理解でき、むしろその展開を見定めるための鍵とさえなる。そのためにまず検討されるべきは「感性論」との整合性である。たしかに空間・時間は「感性論」では「あらゆる感覚にたいし

て心のうちにアプリオリに用意されていなければならない」感性の形式である (A20/B34)。ただし、この形式は「超越論的感性論の段階では感性を孤立させる (isolieren)」方法に従って提示されているものの (A22/B36)、「分析論」の段階では構想力の観点から捉えなおされる (A100, 102, B160-1)。すなわち「空間・時間というもっとも純粹で最初の基本表象」をめぐる覚知の総合 (A102)、あるいは「空間・時間のいっさいの概念が可能になるような総合」という観点の導入である (B161)。

こうした「孤立させる議論」の方法を受入れるならば、空間・時間の「基本表象」が部分／全体の軸だけでなく、多様／統一の軸からも論じられていると解釈できる。第二版演繹で明確に表現されているように、「対象として表象された空間は直観のたんなる形式以上のものを、つまり感性の形式に従って与えられた多様を直観的表象にする総括 (Zusammenfassung) を含んでいる」 (B160)。したがって、構想力の総合によって産出されるのは受容性のアプリオリな形式としての「直観形式 (Form der Anschauung)」ではない。それは「分析論」に至って捉えなおされた空間・時間、すなわち「形式以上のもの」として「表象の統一を与える」ような「形式的直観 (formale Anschauung)」である (ibid.)。

直観形式はたんに多様を与えるだけだが、形式的直観は表象の統一を与える。わたしは感性論ではこの統一を感性にだけ関係づけたが、それはこの統一がいっさいの概念に先立っていることを述べたかったからにすぎない。この統一はある総合を、すなわち感官には属さなくても、それによってはじめて空間・時間のいっさいの概念が可能になるような総合を前提にしている (ibid.)。

以上の議論から、『第一批判』において構想力の全体論は感性の形式論と

同様、段階を踏んで提示されていると分析することができる。つまり、空間・時間の部分／全体の軸に即して総合の「全体性」が主張され（感性論）、さらに多様／統一の軸に即して全体論的な「総合」の必要が論証される（分析論）。かつてハイデガーは空間・時間の「全体性としての根源的統一性（ursprüngliche Einheit als Ganzheit）」を指摘したが、それはこれらの二段階を集約しつつ、感性の統一性を「発源させる（entspringen）」構想力の根源的活動を強調するものである(4)。根源的かつ全体論的な総合はその射程が感性の形式的側面にとどめられている点において批判哲学の構想に接続する。構想力の超越論的総合は「可能的経験の全体」をふちどり、言わば超感性的なものとの境界線を引く役割を担うのである（A146/B185）。

2. 前批判期における構想力

2.1 時間に関する全体論

続いて検討されるのはこのような全体論的活動の成立過程である。主要な先行研究の方法は前節で整理したような『第一批判』の記述と『第一批判』の直前と推定される講義録、すなわち『アカデミー版カント全集』二十八巻の「形而上学 L1」（以下「L1」）との比較だった(5)。その成果は二点に要約できる。第一に、カントの構想力の再生的活動はヴォルフ学派の経験的心理学を基礎とする(6)。第二に、産出的活動のアイデアは「創作能力（*facultas perficiendi*）」に代表されるバウムガルテンの表象能力の理論を継承する(7)。本論はこれらの成果を踏まえつつ、さらに他の講義録も概観することで構想力の二つの全体論的活動を区別する。参照されるのは「L1」に加えて一七七二／七三年の人間学の講義録（以下「七二／七三」）、ならびに一七七五／七六年の人間学の講義録（以下「七五／七六」）である(8)。

さて、批判期では構想力の名に包括される諸活動は七〇年代において「形象能力（*Bildungsvermögen*）」に分類されていた。形象能力は心の自発的能

力だが、対象の表象の感性的受容に依存する限り知性から区別される (XXVIII: 230)。そして受容された表象を「一つの形象にする」この活動には時間軸に応じた下位区分が与えられる。「七二／七三」から一貫して論じられるのは追形象(Nachbildung)、先形象(Vorbildung)、形象完成(Ausbildung)能力である(XXV: 76)。「七五／七六」では現形象(Abbildung)能力が加わり(XXV: 511)、「L1」に至って現・追・先形象能力がそれぞれ「現在の表象、過去の表象、もしくは未来の表象をもたらす」ことが明言される(XXVIII: 235)。

これら三つの講義録の内容の変遷から以下のことが指摘できる。まず、七二年からすでに多様性は表象が受容される時点の複数性に即して考察され、それを前進的に「一つの形象にする」形象能力の総合的活動が自覚されていた(XXV: 78-79)。また、この活動は遅くとも七五年には導入された現形象能力のアイデアによって、所与の対象の空間的多様性にも拡張される(XXVIII: 235-236)。さらにこれらの拡張を経た「L1」では、形象能力は空間・時間において局所的な「一つの形象」のみならず、それらを部分として含む感性の形式の全体性にも関与することが示唆される。

これ [形象能力] は認識をわれわれ自身から作り出す能力であるが、にもかかわらず、それによって対象がわれわれの感官を触発するだろう形式を自らに備えている(XXVIII: 235)。

このように原子論から全体論への構想力の「転回」は追・先・現形象能力をめぐる七〇年代の理論的進展において準備されたと推察される。とりわけカントが現形象能力に「さまざまな側面と視点」から感性的な印象を「見渡す(durchgehen)」活動を与えるとき、そこには追・先形象能力の再生と予期が実質的におりこまれている(XXVIII: 235-236)。それは『第一批

判』の「分析論」では「再生の総合と分かちがたく結ばれて」表象の全体を「見通す (durchlaufen)」総合、すなわち覚知の総合として結実する説明に他ならない(A102-103)。

2.2 内容に関する全体論

しかし他方、七〇年代の講義録には総合の系譜とは異なる形象能力の下位区分も見出される。一つは形象完成能力である。この能力は「七二／七三」では追・先形象能力の誤謬を修正し、補完する役割を与えられていたが、「七五／七六」になると一転して詩的創作の活動を担う (XXV: 512)。また「七五／七六」では構想 (Einbildung) 能力も導入される。それがもたらすのは「現在でも未来でも過去の対象の形象でもない。それはフィクションであり、象徴 (Symbolum) である」(XXV: 511)。最後に「L1」では対応像 (Gegenbildung) 能力も加わる。この能力は「他の事物の形象を生み出すための手段」に関与するが、そのような手段として挙げられるのは「象徴」である (XXVIII: 238)。

では、これらの活動をいかに理解するべきか。近年、K・ヘプファーは「L1」の形象諸能力において「時間的に (zeitlich)」離散する表象の結合と「内容的に (inhaltlich)」異なる表象の結合の二種類が認められることを主張した(9)。本論は前者に追・先・現形象能力を、後者に形象完成・構想・対応像能力を分類した上で、それぞれに別種の全体論的活動が見出されることを指摘しておきたい。手がかりは「象徴」の契機である。「七五／七六」ではこの論点は「勇猛な騎士と貧弱な馬」のような不完全な物語を補完するために用いられていたが (XXV: 512)、補完の活動は「L1」になると部分に優先する全体の能力、すなわち「全体の理念を作り、対象をその全体の理念と比較する能力」として論じられる (XXVIII: 237)。具体的には、そうした「全体の理念」は対応像能力によって「太陽」、あるいは「四肢が一つの全体を

形成している人間の身体」として象徴的に表現される (XXVIII: 238)。

もちろん芸術的創作をめぐるカントの着眼にバウムガルテンの影響があるのは疑いない⁽¹⁰⁾。ただし、「L1」に論じられる「内容的な」全体論は、連想律に従って表象の部分を組み合わせる「構想の規則 (lex imaginationis)」とは一線を画する。なぜなら形象能力が「対象の現実性とは独立に」活動すると述べられるとき (XXVIII: 237)、この能力はあらかじめ「まったく感官の対象ではない対象」、すなわち超感性的な対象を志向する「理性の純粹な使用」に導かれているからである (XXVIII: 243)。このように形象能力は「全体の理念」を象徴的に形象化することで理性と結びつく。『第一批判』においても理性との協働は保持されるが、そこでは芸術的創作の文脈を離れ、推論体系における仮説の設定として捉えなおされる。

構想力がいわば空想にふけるのではなく、理性の厳密な監視下で構想する場合には[…]、それが無根拠のものではないためには、説明根拠としての、現実と与えられた、したがって確実なあるものと結びつけられていなければならない、その場合にはこのような臆見は仮説と呼ばれる (A770/B798)。

以上の議論をまとめたい。七〇年代の形象能力の理論には (ハイデガーの古典的研究に反して) 二つの全体論的活動の系譜が指摘できる。一つは時間軸を通じて与えられる感性的表象を「一つの形象」あるいは「感性の形式」にもたらず活動であり、追・先・現形象能力に認められる。もう一つは理性の超感性的な理念を象徴的に形象化する活動であり、形象完成・構想・対応像能力に認められる。いずれの活動にとっても転換点は七五年前後と推察され、この時期に現形成能力ならびに構想能力のアイデアが導入された。

3. 批判後期における構想力

3.1 構想力と量のカテゴリー

ここに至って、本論は総合の射程を超えた構想力の理論に照明をあてることができる。前節で示されたもう一つの全体論、すなわち構想力と理性の協働は八〇年代の歴史哲学の小論にも示唆されるが (VIII: 109)、それが主題化されるのは『第三批判』である。とりわけ注目されるのは「崇高の分析論」(以下「崇高論」) だろう。「崇高論」は「美の分析論」と同様に「構想力の自由」を主張しつつ (V: 269)、この「自由」において「全体的使命 (ganze Bestimmung)」ないし「超感性的使命 (übersinnliche Bestimmung)」を見出そうとする (V: 258-259)。本論はこれらの活動を検討するにあたって、まずは「崇高論」に論じられる「構想力の自由」の内実を『第一批判』の全体論的総合との対比によって明らかにしたい。

すでに指摘したように、『第一批判』の「分析論」において総合は多様／統一の軸から論じられる。ただしカントによれば、総合を支えるのは「意識の必然的統一」を与える「一つの意識」(A103)、換言すれば「カテゴリーにおいて思考される超越論的統一」である (B151)。B・ロングネスはこの論点をカテゴリーの種類に応じて細分化し、総合における量のカテゴリーの意義を次のように指摘する。「量のカテゴリーにおいて反省されるのは同種的な量一般の総合であり[…], これなくして現象にいかなる判断も下すことができない」。とりわけ全体性 (Allheit) のカテゴリーはその「最初の適用」(B152) において空間・時間を「無限の与えられた量 (quanta infinita)」(B40) として構成する⁽¹¹⁾。ロングネスの解釈を採用するならば、全体論的総合は量のカテゴリーに従った構想力の超越論的活動として同定される。

ところが「崇高論」では、構想力の活動はこの量のカテゴリーからの自由によって特徴付けられる。おおまかに述べるならば、その議論は二段階

から成る。主体は自然の並はずれた大きさや力に接したとき、(i) 感性的表象の全体を総括できない構想力の挫折を経験するが、(ii) その挫折を通じて、全体性を志向する主体自身の超感性的な能力が快の感情を伴って自覚される (V: 254)。この議論において (i) から (ii) への移行の鍵となるのは、自然の表象の全体を把握しようとする構想力の「総括 (Zusammenfassung)」の活動である。

ある空間を測定すること (覚知としての) は同時にその空間を描くことであり、それゆえ構想力の構想 (Einbildung) における客観的な働きであり、また一種の前進 (Progressus) である。これに反して、多 (Vielheit) を思考内容の単一性のうちにではなく直観の単一性のうちに総括することは、したがって継起的に=覚知されたものを一瞬間に (in einen Augenblick) 総括することは、一種の逆行 (Regressus) である (V: 258-259)。

総括は量のカテゴリーに従った総合からはっきりと区別されている。それは連続的に前進する時間の流れを「逆行」させるような、「一瞬間に」なされる全体論的活動である。この活動は「覚知が進むにつれて困難になり」、最終的に「構想力はそれ以上進むことができない最大の大きさ」に達する (V: 255)。カントによれば、この「挫折」に至るまで「無限なものを全体として考える」よう構想力を導くのは「理性の声」に他ならない (V: 254)。すでに構想力の総括において理性が協働しているからこそ、(i) から (ii) への移行、挫折の不快から理性の快への「すり替え (Subreption)」が可能になるのである (V: 257)。

3.2 構想力と合目的性

このような『第三批判』の構想力の理論を、従来の多くの研究は依然と

して総合の一種、あるいは総合の前段階として解釈してきた(12)。しかし、そうすると総括の「逆行的な」活動を説明できず、したがって「すり替え」の議論を可能にする理性の関与も明らかではない。他方、七〇年代の形象能力の射程が示唆するのはもう一つの全体論的活動、すなわち理性と結びついた構想力の活動である。この協働にあつて構想力が志向するのは「現在でも未来でも過去の対象の形象でもない」(XXV: 511)。志向されているのは時間の系列の外にある「絶対的全体の理念 (Idee des absoluten Ganzen)」であり、この理念に即して構想力の「超感性的使命」が存する (V: 258)。

ただし、だからといって『第三批判』は形象能力の理論をそのまま継承するものではない。一つの進展は構想力による象徴を道徳性との関係において論じる五十九節の記述に認められるが、ここでは前節で整理した「崇高論」の (ii) の段階から二点を指摘しておきたい。

第一に、対象から主体へ焦点が移行する。すでに述べたように、『第三批判』の構想力は対象の形象化にむしろ挫折することで、主体の超感性的能力を自覚させる役割を果たす。正確には、この挫折において主体が導かれるのは「超感性的基体 (übersinnliches Substrat)」である (V: 254-255)。たしかにこの概念はカントによって多義的に用いられており、『第三批判』では「われわれの外にある」ヌーメナルな対象の根拠も指示される (V: 196)。しかし、「崇高論」では「超感性的基体 (自然の、そして同時に、われわれの思考する能力の根底にある)」と表現されていることに注意したい (V: 255)。構想力は形象化されえないほどに並はずれた「自然」の崇高を挫折によって描きつつ、その全体性をなお理念的に把握しようとする「われわれの思考する能力」を示すのである。

第二に、理性から反省的判断力へ焦点が移行する。第一の論点から示されるように、「崇高論」において対象としての自然の全体性が問われるとき、それは「われわれの思考する能力」に即して主観的にのみ表象される。構

想力はその総括において協働する理性を示すだけでなく、「対象に関する主観の合目的性」を明らかにするのである(13)。

しかし、事象（自然および芸術）の諸形式についての反省から生じる快の感受は、反省的判断力との連関における客観の合目的性を、主観における自然概念に即して示すだけでなく、逆にまた対象に関する主観の合目的性を、対象の形式に即して、それどころかその無形式にすら即して、自由概念に基づいて示す（V: 192）。

二つの論点から浮かびあがるのは『第三批判』における構想力の理論的進展である。カントの表現を借りるならば、構想力の全体論的活動は全体性の理念を「虚構や幻影の下で溺死させ（ersäufen）ない」ための背景理論に支えられてきた（A782/B810）。それは象徴の契機であり、仮説の設定であり、量のカテゴリーに従った総合である。そして『第三批判』においてその背景をなすのは主観的合目的性の概念に他ならない。「崇高論」に示されるように、構想力の理論は全体性という形而上学の構想を保持しつつ、これを主観的かつ合目的な全体性に転化することで、反省的判断力の超越論的原理に接続されているのである。

結論

本論は構想力の全体論的活動について、前批判期から『第一批判』にかけての成立過程、ならびに『第一批判』から批判後期にかけての理論的進展を明らかにすることを目的としていた。最後に、これまでの議論から得られた成果を時系列に従って回顧したい。

(1) 七〇年代の形象能力の理論には二つの全体論的活動が認められる。一つは感性的表象を時間の系列に即して形象化する活動、もう一つは理性

の超感性的理念を象徴的に形象化する活動である。いずれも七五年前後を結節点として理論的に洗練されている。

(2)『第一批判』(八一年)の「分析論」は前者の全体論的活動を総合の理論として提示する。超越論的総合は量のカテゴリーに従い、空間・時間の形式的直観を産出する。ここでは感性の形式の全体性が総合されることで、超感性的なものとの境界線が引かれる。

(3)『第三批判』(九〇年)は後者の全体論的活動を総括の理論として提示する。ただし、「崇高論」では総括が並はずれた自然に際して挫折することによって、構想力を全体性に駆りたてる理性、さらにそのような主観の諸能力と自然の合目的性が明らかにされる。

これらの成果から明らかにされるのは、批判期の構想力の理論がヴォルフ学派の経験的心理学の枠組みから脱却していること、そしてこの能力が全体性の理念をめぐるカントの思想の深まりに照応し、総合をはるかに超えた広い射程を有することである。

もちろん、本論の検討によって構想力の射程が尽くされたわけではない。近年にはバウムガルテンからの影響の精査、あるいは『実践理性批判』における構想力の検討が着手されつつあるが⁽¹⁴⁾、とりわけ今後の研究課題となるのは(2)から(3)に至る八〇年代の構想力の発展過程である。具体的には、構想力と理性の関係に議論が費やされている『ベルリン月報』の小論「思考において方位を定めるとはいかなることか」、そして「人類史の憶測的始元」(いずれも八六年)が手がかりになるだろう。これらを検討するだけの余裕は本論に残されていないが、八〇年代のカントが歴史哲学を合目的性の概念によって捉えなおそうとするとき、歴史の全体を「構想する」能力に再検討が加えられたことは疑いない。

さらに『第三批判』が十九世紀の哲学に与えた影響からひるがえって照明をあてるならば、構想力の理論には(3)でなされた議論以上の奥行きも

与えられる。本論は「崇高論」における合目的性を主体と自然の関係において指摘したが、カントはいくつかの局面ではこの関係から逸脱し、主体そのものに内在する合目的的全体性に議論を進めている（V: 204, 222, 254, 259）。たとえばそれは、構想力によって明らかにされる「心の全体的使命（ganze Bestimmung）」が言及される局面である（V: 259）。カッシーラーの示唆によれば、この言及の背景には部分としての諸能力に先行する「意識機能の全体性」、そして分化する諸部分の母体としての「生命形式の全体」が見出される⁽¹⁵⁾。このような思想的展望にあつて、カントの構想力は全体性の理念を有機的生命の次元に接続する役割も担うことになるだろう。

注

(1)[坂部, 1993], p. 371.

(2)批判後期における構想力と全体性の理念の関係について、三木清は「構想力は[……]全体の理念に関わるものとして、理念の能力もしくは全体性の能力と考えられる理性に関係する」と指摘している（[三木, 1967], p.329）。カッシーラーの指摘については注（14）を参照。

(3)ストローソンは『意味の限界』では総合の理論を退けたが、後の「構想力と知覚」では構想力の意義を知覚の基礎的次元、とりわけ「知覚における通常概念の適用（ordinary concept-application in perception）」において見出す解釈を示している（[Strawson, 1982], p.98）。

(4)[Heidegger, 1977], p.135.

(5)ただし正確には、ハイデガーや H・メルヒェンの研究が参照した「L1」は『アカデミー版カント全集』二十八巻ではなく、カール・ペーリッツ編『カントの形而上学講義』に収録されていたものである。また[八幡, 2002]で整理されているように、これまで「L1」の成立時期はさまざまに推察されており、先行研究からは（1）七三／七四年直後、（2）七五／七六年から

七九／八〇年までの間、(3) 七九／八〇年から八四／八五年の間の時期が挙げられている。この点について本論は近年の解釈傾向とともに(2)の時期を推察したい。少なくとも形象能力の理論的進展に注目するならば、(a) 「L1」は形象完成・構想・対応像能力の記述において七五／七六年の記述以上の進展を示しており、(b)『第一批判』(八一年)は覚知の総合の記述において現形象能力をめぐる「L1」の記述以上の進展を示しているからである。

(6) *imaginatio* をめぐるヴォルフとカントの影響関係は A・ボイムラーと H・メルヒェンによって比較的早くから指摘されてきた ([Bäeumler, p.1967], p.145-146, [Mörchen, 1970], S.14)。

(7) 後述するように、カントの形象能力の理論的進展に与えたバウムガルテンの影響をもっとも明快に整理しているのが R・マックリールの研究である ([Makkreel, 1997], chap. 1)。また近年の先行研究としては、バウムガルテンの『形而上学』における構想力の記述を整理した松本長彦の研究を参照した ([松本, 2008], pp.95-98)。

(8) 二つの講義録は『アカデミー版カント全集』二十五巻に収録されている。一七七二／七三年の講義録はコリンズらのノートを、一七七五／七六年の講義録はフリードレンダーらのノートを基礎とするものである。

(9) [Hepfer, 2006], pp.48-49.

(10) マックリールによれば、七〇年代のカントはバウムガルテンの『形而上学』に列挙される表象諸能力を、形象能力という包括的能力の下で統合的に理解している ([Makkreel, 1997], chap. 1)。同様の調査はヘプファーによってもなされている ([Hepfer, 2006], pp.22-23)。

(11) [Longuenesse, 1998], p.270.

(12) たとえば D・ヘンリッヒによれば、美感的判断は「概念形成プロセスと両立可能であるけれども[...]、原則的にはそうした概念形成プロセスに先行

するような認知的プロセスから十分に説明される」 ([Henrich, 1992], p.38)。このような観点から『第三批判』の構想力の前・認知的 (pre-cognitive) な活動を捉える問題点を本論とは異なる観点から指摘した近年の研究として、P・ガイヤーの論文を参照 ([Guyer, 2006])。

(13)「崇高論」において諸能力と自然の合目的的關係を読みこむことの妥当性は、「崇高論」に言及される「超感性的基体」が、五十七節において「判断力に対する自然の主観的合目的性についての根拠一般」に位置付けられていることから裏付けられる (V: 340)。

(14)『第二批判』を始めとするカントの実践哲学のなかに構想力の理論を読みこもうとする解釈はきわめて希少であり、近年の研究でも [Freydberg, 2005]が「幸福」と「動機」の論点を中心に先鞭をつけるのみである。

(15) [Cassirer, 1911], chap.6. また、ボイムラーが『第三批判』の目的論が「美感的人間という形態における個体 (Individuum)」にも適用されると述べる時、この見解の背後にはカッシーラーと同様、有機的生命を媒介として『第三批判』の前半と後半を架橋しようとする意図があるように思われる ([Bäeumler, 1967], p.303)。

参考文献

Bäeumler, Alfred [1967] *Das Irrationalitätsproblem in der Ästhetik und Logik des 18. Jahrhunderts bis zur Kritik der Urteilskraft*, Darmstadt.

Cassirer, Ernst [1911] *Kants Leben und Lehre*, Berlin. (邦訳: E・カッシーラー (門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修) 『カントの生涯と学説』、みすず書房、一九八六年。)

Freydberg, Bernard [2005] *Imagination in Kant's Critique of Practical Reason*, Indiana University Press.

Gibbons, Sarah [1994] *Kant's Theory of Imagination: Bridging Gaps in Judgement*

and Experience, Oxford University Press.

Guyer, Paul [2006] “The Harmony of the Faculties Revisited,” *Aesthetics and Cognition in Kant’s Critical Philosophy*, Rebecca Kukla ed. Cambridge University Press, pp. 162-193.

Heidegger, Martin [1951] *Kant und das Problem der Metaphysik*, Frankfurt am Main : Klostermann.

Heidegger, Martin [1977] *Phänomenologische Interpretation von Kants Kritik der Reinen Verunft*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann. (邦訳:ハイデッガー (石井誠士・仲原孝訳) 『カントの純粹理性批判の現象学的解釈』、創文社、一九九七年。)

Henrich, Dieter [1992] *Asthetic Judgment and the Moral Image of the World*, Studies in Kant, Stanford, Calif.: Stanford University Press, p.38.

Hepfer, Karl [2006] *Die Form der Erkenntnis: Immanuel Kants theoretische Einbildungskraft*, Verlag Karl Alber Freiburg.

Longuenesse, Beatrice [1998] *Kant and Capacity to Judge*, trans. C. Wolf, Princeton University Press.

Makkreel, Rudolf [1997] *Einbildungskraft und Interpretation: Die hermeneutische Tragweite von Kants Kritik der Urteilskraft*, Paderborn: Schöningh.

Mörchen, Hermann [1970] *Die Einbildungskraft bei Kant*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Strawson, Peter. F. [1982] “Imagination and Perception,” reprinted in Ralph Walker, *Kant on Pure Reason*, Oxford University Press, pp.82-99.

Waxman, Wayne [1991] *Kant’s Model of the Mind: A New Interpretation of Transcendental Idealism*, Oxford University Press.

Wunsch Matthias [2007] *Einbildungskraft und Erfahrung bei Kant*, Walter de Gruyter.

Young, Michael J. [1988] “Kant’s View of Imagination,” *Kant-Studien* 79, pp. 140-164.

坂部恵 [1993] 「構想力の射程」、竹市明弘、坂部恵、有福孝岳編『カント哲学の現在』、世界思想社。

松本長彦 [2008] 「カント批判哲学に於ける構想力概念の成立(上)」、『愛媛大学法文学部論集』、二十五号、89-103 頁。

三木清 [1967] 『三木清全集第八巻 構想力の論理』、岩波書店。

八幡英幸 [2002] 「解説(形而上学講義)」、八幡英幸・氷見潔『カント全集 19 講義録 I』、岩波書店。

付記: 本稿は、平成 26 年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

(ながもり のぶとし 立命館大学大学院 文学研究科
／日本学術振興会 特別研究員)